

## クラリスロマイシンの使用が心臓病死のリスク増大と関連

マクロライド系抗菌薬は QT 間隔を延長するため、致死的不整脈リスクを増大する可能性があることが示されている。本研究では、マクロライド系抗菌薬と心臓病死リスクの増大との関連を、クラリスロマイシンとロキシスロマイシンについて評価した。

1997~2011 年にデンマークにおいて 40~74 歳の成人 5,104,594 人を対象に、クラリスロマイシン (160,297 人)、ロキシスロマイシン (588,988 人)、ペニシリン V (4,355,309 人) による 7 日間の治療コースを実施した。その結果、心臓死に至ったのは 285 人であった。ペニシリン V 群と比較して、クラリスロマイシン群では有意な心臓死リスクの増大がみられたが (補正後率比 : 1.76)、ロキシスロマイシン群では有意な増大はみられなかった (補正後率比 : 1.04)。また、クラリスロマイシンの使用でのリスク増大は、女性において顕著であった (補正後率比 : 女性 2.83、男性 1.09)。

この大規模研究により、クラリスロマイシン使用が心臓病死リスクの増大と有意に関連し、ロキシスロマイシン使用ではリスク増大はみられないことが示された。よって、マクロライド系抗菌薬の広範投与について独立集団での確認が必要である。

出典 : British Medical Journal(Clinical research ed.). 2014; 349: g4930